

# 日本近代文学会 関西支部 会報 第十四号

関西支部事務局 10・8・30

## ★支部大会研究発表題目

### ◎二〇〇九年秋季大会

〔11月7、8日 於・関西大学〕

【支部創設30周年記念・日韓共同開催特別企画「海を越えた文学（1）——日韓を軸として——」】

#### ・特集趣旨説明

木村一信（立命館大学）

・明成皇后・表象試論——三好徹「閔妃殺害」をとおして——

三谷憲正（佛教大学）

コメンテーター

金容安（漢陽女子大学）

・安部公房の〈満州〉体験

李貞熙（成徳大学校）

・朝鮮詠の俳域——朴魯植と村上杏史——

中根隆行（愛媛大学）

コメンテーター

崔在喆（韓国外国語大学校）

・日本留学時代の金史良に関する小考

許昊（水原大学校）

・講演 どこにも根を張れない種が  
つけた蕾

玄月（小説家）

#### 【自由発表】

・寺山修司「書を捨てよ、町へ出よう」における「若者」

秋吉大輔（立命館大学院）

・井上靖『敦煌』論——方法と歴史認識について——

山田哲久（同志社大学院）

・内野健児と植民地期「朝鮮」の日本語詩壇——「郷土色」の創出と内野の詩における自他表象——

楠井清文（立命館大学）

### ◎二〇一〇年春季大会

〔6月12日 於・甲南女子大学〕

【シンポジウム 村上春樹と小説の現在——記憶・拠点・レスポンス・ビリティ】

司会 飯田祐子 黒田大河

・ポストモダン・ローカリティ——村上春樹の「開かれた焦点」とその主題化 高木彬  
（京都工芸繊維大学大学院）

・村上春樹は世界文学か日本文学か——近代化過程と文学の表現をめぐって

中川成美（立命館大学）

・「正しさ」の村上春樹論的転回

石原千秋（早稲田大学）

・ピンポンと弑逆——小説について考えるときに読者が考えること

千野帽子（文筆業）

## ★支部大会印象記

### 二〇〇九年度秋季大会印象記

秋季大会は、支部創立三〇周年記念の行事の一環として、土日の二日間わたって行われた。ここでは、土曜日の日韓共同開催特別企画「海を越えた文学（1）——日韓を軸として——」について報告する。この日は、四人の発表者十二名のコメントーターからなる研究発表の特集と、作家玄月氏による講演があった。企画立案者である木村一信氏の趣旨説明のあと、最初の三谷憲正氏の発表「明成皇后・表象試論——三好徹「閔妃殺害」をとおして——」があった。豊富な資料をもとに、従来多くの書籍・資料集で明成皇后とされてきた肖像写真が、当時の「官妓」の写真であったことを明らかにされた。続いてコメンテーターの金容安氏から、西洋人が残した資料による観点、および研究の大きな狙いについて質問があった。二人目は李貞熙氏の「安部公房の〈満州〉体験」。安部公房文学の壁、砂漠イメージを、作家の満洲体験との関わりという視点から、発表者自身の実地踏査にもとづいて考察する発表であった。三つ目は中根隆行氏の「朝鮮詠の俳域——朴魯植と村上杏史——」で、コメンテーターは崔在喆氏。中根氏は朝鮮半島における俳句の問題は、著名俳人の渡韓だけではなく、在朝鮮の

日本俳人・愛好者および朝鮮俳人・愛好者にまで広げて検討する必要があるとし、朴魯植、村上杏史二名の俳人の軌跡をたどった。崔氏からは韓国の古典定型詩「時調」との比較という視点などが示された。最後は許昊氏の「日本留学時代の金史良に関する小考」。あいまいな年譜や伝記の問題点を指摘しながら、中学校退学の経緯、渡米の希望、渡日、逮捕歴、北朝鮮メディアとの関係性などについて検証し、抵抗の民族作家と顕彰されることの多い金史良像の再考の必要性を主張された。

作家玄月氏の講演「どこにも根を張れない種がつけた蕾」は、生い立ちや家庭の背景、日本で「在日」として生きることの困難さ、「宙ぶらりん」という感覚、作家としてデビューするまでの軌跡など、氏の個人史にまつわる話題と、「在日韓国朝鮮人」という存在の歴史的な背景や現状、「在日作家」の世代間の差異などについての広い視野の話題とが交差しつつ示され、興味深いものであった。

このような日本文学を研究する団体の国際的交流（だけではなく国内や時代間もむろん必要だが）は、今後もどんどん開かれるべきだろう。関西におけるその端緒として意義のあるものであったと考える。今回は最初でかつ記念行事ということもありゲスト／ホストという雰囲気が強かったが、今後よりフラットな場で

突っ込んだ議論ができるようになれば、もつと面白くなるだろう。なお、今回の大会に際しては「予稿集」が刊行された。これは「出版」とカウ  
ントできるため発表者への強いイン  
センティブになりうる。今後も続け  
ていただけるよう要望する。

(日比嘉高)

今回の学会は、日本近代文学会関  
西支部の創立三十周年を記念して、  
「海を越えた文学」という特集主題  
で、韓国日本近代文学会と共同で開  
催された。木村一信氏の趣意説明の  
ごとく、二〇一〇年、日韓交流一〇  
〇年の歴史の中で、海を渡ってきた  
韓国人が、母語でなく、日本語で文  
学を表現することにおいて、何が書  
けて、何が書けなかったか、彼らの  
問題意識は何であったかを研究する  
のは、意味深いことであるに違いな  
い。

最初の発表、三谷憲正氏「明成皇  
后・表象試論」は、明成皇后のイメ  
ージに関して論じたもの。三谷氏は、  
現在、日本と韓国とで共通的に使用  
されている明成皇后の写真資料を検  
討、『The Passing of Korea』の中の  
「正装の朝鮮婦人」「正装の宮中の  
女」と名付けられた写真が、戦後、  
(何らかの理由で)明成皇后のイメー  
ジとして決定づけられたと説明し  
た。コメンテーターの漢陽女子大学  
の金容安氏は、このようなイメー  
ジ生成への関心よりは、明成皇后殺害

事件に対する韓国人たちの永遠な苦  
しみと、日本の責任糾明に注目し、  
この事件に対する両国間の微妙な観  
点の「ズレ」が感じられた。

つづく李貞熙氏「安部公房の『満  
州』体験」は、安部文学の砂漠や荒  
野、壁のイメーヂを、作家の満州地  
験からアプローチして論じたもの。  
李氏は、作家との感覚の共有を目指  
して、当時安部の住んでいた満州地  
域を体験したという。李氏の発表は、  
綿密な資料調査を踏まえて、作品の  
背景との対照、分析を行っている堅  
実な研究であった。

次は、中根隆行氏「朝鮮詠という  
俳域——朴魯植と村上杏史」であつ  
た。中根氏は、一九一〇年以降活況  
を呈していた在朝鮮「朝鮮俳壇」の  
活躍を紹介し、朝鮮における俳句の  
広がりや位置づけを明らかにしよう  
とした。特に、韓国ではあまり知ら  
れていない朝鮮人俳人の朴魯植など  
の句作を「朝鮮詠」の文脈に照らし  
合わせて検討を行った。日本の俳句  
は現在でも活発に句作されているの  
に対して、韓国の伝統詩の「時調」  
が活性化されていない理由は何かと  
いう崔在喆氏の指摘や、朴がなぜ俳  
句に心酔したのか、など、これから  
の展開を期待させる発表であった。  
四本目の発表、許昊氏「日本留学  
時代の金史良に関する少考」は、民  
族主義作家と言われている金史良に  
ついての評価を徹底的に解剖する試  
みであった。許氏は、金史良に関す

る資料の中で幅広く引用されている  
安宇植『評伝金史良』を取り上げ、  
この中で作意されていると思われる  
金史良の中学校退学の問題や、従軍  
作家としての活動の真偽などに対し  
て、徹底した検証が必要であると述  
べた。

第一日目の最後は、玄月氏の講演  
「どこにも根を張れない種がつけた  
蕾」。在日二世として活躍している  
氏の話を聞きながら、何らかの理由  
で国を後にして他国に来、根を下ろ  
さずにはいられなかった在日一世の  
痛みや、日本で帰化せず韓国人とし  
て生きていくことの難しさなど、目  
に見えない「壁」のようなものが感  
じられた。「海を越えて」きた人々  
が、この地に定着して、もう一世紀  
になっているものの、未だその根を  
張れないという、題目の含蓄的な意  
味を考えることにもなった。

学会に参加した大部分の人々、特  
に海を越えてこの学会に参加した韓  
国側の参加者たちは、個人差はある  
とはいえ、「海を越えて」きた人々  
が日本で成し遂げた彼らの文化と痕  
跡が、今後、独自にはありながら  
も、調和されることを祈ったに違  
いない。第一日目はそのような希望と  
期待だけでなく、研究発表に対して  
の活発な質疑と討論とで盛り上がっ  
た一日であった。

(趙柱喜)

大会二日目は三本の自由発表が行

われた。まず秋吉大輔氏「寺山修司  
『書を捨てよ、町へ出よう』におけ  
る『若者』像」は、同作品がとらえ  
た若者像を明らかにすることで、風  
俗的側面が強調された六〇年代の寺  
山の活動を、同時代における批評性  
を持ったものとして再評価する試み  
であった。当時のアカデミズム・ジ  
ャーナリズム言説が対象とした「若  
者」と、寺山が対象としたそれを微  
分し、前者をやや批判的にとらえた  
論旨であった。だが質疑において同  
時代を知る世代から相次いで違和感  
が提示されたように、発表者のとら  
えた「若者」像そのものにも少し  
の検討が必要だったようにも思われ  
た。「地方出身の若年労働者」の典  
型として寺山が見出したとする永山  
則夫自身が、同時期のジャーナリズ  
ムが作りあげた青年像でしかなか  
ったことも相対化しておく必要があ  
ったかもしれない。

続く山田哲久氏「井上靖『敦煌』  
論——方法と歴史認識について——」  
は、趙行徳を文字文化の伝達者とし  
てとらえる作品の読みと、執筆当時  
に行われた敦煌展の背景を交錯さ  
せ、『敦煌』に新中国と西欧諸国  
間で生じた文化略奪をめぐる問題が  
あることを読み解いたもの。同時代  
状況の丹念な調査と作品の解釈を結  
び合わせようとする氏の発表態度に  
は好感を抱いた。ただ無い物ねだり  
を承知で言えば、井上靖が敦煌展を  
めぐる同時代的言説に文化略奪の問

題を透視していたとするならば、それは氏の言うように中国と西欧諸国との間の問題だけに目が向いていたのだろうか。中国が新国家編成の過程で周辺民族に対して向けた文化／領土的圧迫を、はたして同時期の井上は感知していたのか、あるいは小説『敦煌』は、この問題にいかなる応答をなしうる可能性があるのかも聞いてみたかった。

最後の楠井清文氏「内野健児と植民地期『朝鮮』の日本語詩壇——『郷土色』の創出と内野の詩における自己表象——」は、植民地期朝鮮の日本語コミュニティの創設者である内野がやがてそこから脱していく過程を追いつつ、植民地期朝鮮の日本語文壇をめぐる状況を浮上させた発表であった。内容が前日の特集と共通しており、楠井氏自身も前日（特に中根氏の発表）の議論を強く意識しながらの発表だったようである。そのため発表は予定の段取りを変更しながら進められ、論旨が一部把握しづらくなったのは残念であった。だがレジュメに挙げられた資料は、質的にそれを十分補っていたし、それらに基づく犀利な分析には圧倒された感もあった。そして質疑もそれに呼応するかのように、氏の議論を発展・深化させる発言が多く出されていた。たとえば木村一信氏が投げかけた「内野を固定化された朝鮮の打破を目指した作家と評価すること自体が、日本人（研究者）の傲慢さを

示すことにならないか」という危惧は、参加者に外地日本語文学研究の抱える根本的な問題を再考させただろう。また内野の詩「李王墓去」中の「白衣」の語をめぐって日韓双方の出席者から多くの解釈が提出された場面は、日韓共催が決して形式的なものではなかったことを十分に感じさせた。

閉会にあたり、許昊氏より次回は韓国での共催を期待する旨が述べられた。今大会の成果を目にした参加者としては、ぜひそれが実現してほしいと願っている。

（木田隆文）

## 二〇一〇年度春季大会印象記

会場の甲南女子大学が村上春樹にゆかりのある芦屋に近かったこともあってか、用意された椅子のほとんどが熱心な研究者や学生で埋められ、シンポジウム開始直前の会場にはコンサートの開幕前のような熱気すら感じられた。

最初の高木彬氏は、神戸・芦屋といった村上の故郷が地名の剽奪されただどこでもない空間とされていることに注目し、それゆえに他のあらゆる空間を充填できることを指摘した。故郷喪失者が集まる都市にこそ〈匿名の空間〉が出来るのが一般であるが、村上作品の場合、ローカリティが「開かれた焦点」となりグ

ローバルな空間に繋がっていくという論旨は新鮮であった。高木氏の問題意識と近く、より精度の高いテクスト分析から論じたのが、三番目の発題である石原千秋氏である。石原氏は、主に『ノルウェーの森』以降のテクストから「正しい」という言葉をピックアップして、「正しさ」の基準が見失われるのはいつとも主体自身に関わる場合であることを指摘し、そこに「純文学」あるいは『僕

って何』風の自分探しの要素を見出した。高木氏と通じると感じたのは、いささか通俗的な家族の社会的な価値観によってまで「正しさ」の根拠という空白を埋めようとする村上の「転回」に論が及んだときである。中川成美氏は、近代小説という枠組みの進化とポストモダンの文脈との両面から村上を俎上に載せた、スケールの大きな発表だった。問題視されたのは、村上春樹を世界文学として読むべきかどうか、そして、翻訳の役割である。特に、翻訳が原文に先んじて物語の跳躍を予期させる働きを示しているという展開は刺激的であった。同様に物語論的な枠組みから斬り込んだ千野帽子氏は、村上作品のピンポン構造（出会わない二人の視点人物が交互に登場し物語が同時並行的に進む構造）に焦点を当てて、レーモン・クノーやロブ・グリエ、ミラン・クンデラと比較しつつ論じた。いわゆる〈異界もの〉である村上の小説から「王殺し」の

物語内容・主題に繋げる論の展開は、80年代以降の映画・物語論を再考すべきことを考えさせ、特に興味深いものだった。

以上のように発題はそれぞれ重厚なものであったが、討議では全体として論点が噛み合わなかったようである。ただ議論を通して浮かび上がった問題は、村上における「通俗性」の内実である。だれもが村上が重要な作家であることは認めるが、かといって現実にコミットした作家であるかどうかという疑問符がつく。それはたとえば、討論の際中川氏が指摘したように、60年代の学生運動の断片を作品に詰め込みつつも、その記憶を保存しようとしているわけでもなく、コンテンポラリーを描くための材料とする村上の姿勢からであろうし、高木氏のいうように村上が歴史をサンプリングのマテリアルとしてに過ぎないからである。そのことを考える意味でも今回のシンポジウムの「記憶・拠点・レスポンシビリティ」というサブタイトルは当を得たものであったし、これからの課題でもあった。

（杣谷英紀）

「村上春樹と小説の現在——記憶・拠点・レスポンシビリティ」と題されたシンポジウムは、『1084 BOOKS』出版直後の〈村上春樹〉をとりあげた極めてタイムリーな企画であった。関西に生まれ神戸と

ゆかりの深い春樹の、95年（阪神・淡路大震災、オウムサリン事件）以降を一つの結節点ととらえる「データチメントからコミットメントへ」（『村上春樹、河合隼雄に会いに行くと』1996）をキーワードに、4人の報告が展開された。

高木彬氏は、ポストモダン以降の小説表現とローカリティをめぐる視座を見いだすべく、80年代の四部作の空間構造を参照枠として（開かれた焦点）の構造自体の自己言及的な主題化や、方法としての（歴史群のサンプリング）をキーワードに、「焦点空間におけるコミットメント形式の変容」として春樹のテキスト群を都市論的に読み解く。

中川成美氏は（発題者曰く）「良き読者」ではない（日本人／文学／研究者）の「私」の体験を起点として、日本語で書き、翻訳「させる」システムを意識的に選択しながら、「世界」中であらゆるパッケージをまとって出版され続ける「村上春樹」を錯綜するテキストとして相対化し、「文学」そのものの再布置をはかる。

前者二人のマクロな視点とは対照的に、後半は緻密な読みの世界が展開した。

石原千秋氏は転換期以前に照準を合わせ、『ノルウェイの森』や、『ねじまき鳥クロニクル』に加え、春樹の小説中ではほとんど言及のない『国境の南、太陽の西』（1992）の中

から「正しさ」というキーワードを抽出し、それが依拠する対象の変化を通して、社会に「データチメント／コミットメント」する様態を明らかにする。

千野帽子氏は『1973年のピンボール』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『海辺のカフカ』『1084』を例に、小説の語り形態を「出会わない二人の語り手」、複数の視点人物の行動を交互に報告しあう「物語のピンポン形式」と捉え、先行するレーモン・クノーやアラン・ロブリグリエなどを参照しながら、読むことの快楽へと論を進める。

果たして私たちはテキストを読む「場所」や「時間」について、どれほど意識的であるのだろうか。たとえば「日本／近代／文学／会」において、同時代作家を規定し続けることに、どれほど自覚的であるだろうか。少なくともこの日の4人のパネリストは、みな自身のポジショナリティに、極めて自覚的な論者だったと思える。そうした矜びに倣えば、たとえば、当日何度も交わされた文学の命題たる「僕って何？」という言葉に、女である私は「僕って何」と問うのは誰でしょう？と問うてみたい衝動にかられたりもする。社会と切り離された（かのように見える）「学会」という特別な時空が、あるいは文学研究という非実学的ジャンルの存在証明が、必要と

される場所がもしあるとすれば、「正しさ」や「データチメント」のはびこる社会の中に抵抗し続けることではないのではないか。そんな印象をもった。

（杉田智美）

### ★会員の業績

（凡例）

著書名：『 』  
論文名：「 」  
掲載紙誌名：『 』  
注記等：（ ）

※関西支部会員の業績のうち、○九年四月から一〇年三月までに発表されたものを収録した。

※各業績に付した番号のうち、①は単行本、②は雑誌・単行本等収録論文、③はその他（研究ノート・書評・口頭発表・項目執筆等）を示す。なお、①は書名・出版社・発行年月の順、②は論文タイトル・掲載誌・発行年月の順、③はタイトル・掲載書（発表会名）・発行年月（日）の順で記した。

※掲載紙誌の巻号数は省略し、雑誌・単行本は発行年月のみ、新聞・会報等は発行年月日を記した。

※原則として、その他業績の種類、執筆項目等の詳細、編者名・発行所名等は会員の届出に記載のあつ

たもののみを記した。  
※著者名・論文名・掲載紙誌名の用字は、会員届出の記載に拠った。

### ア行の部

#### 青木亮人

- ② 「スケートリンクの沃度丁幾——山口誓子『凍港』連作俳句について——」『スポーツする文学』（足田雅昭・日高佳紀・日比嘉高編）青弓社〇九年六月
- ② 「斎藤松洲の『俳諧絵葉書』『俳文学研究』〇九年十月
- ② 「祖翁」を称えよ、教導職——明治の俳諧結社・明倫講社と『田中千弥日記』について——『同志社国文学』〇九年十二月
- ② 「菊の詠みどころ——明治期俳諧宗匠と正岡子規達作品から——」『アート・リサーチ』一〇年三月
- ② 「窓の灯、雪を溶かさず——正岡子規『新俳句』と月並句の差異について——」『同志社国文学』一〇年三月
- ② 「鶉飼の罪——明治期「写生」考——」『俳文学研究』一〇年三月
- ③ 「あの頃、俳句は」『円虹』〇九年四月〜連載中
- ③ 「俳諧いまむかし」『氷室』〇九年四月〜連載中
- ③ 「批評家達の写生」『翔臨』一〇年二月〜連載中
- ③ 項目執筆「空襲／敗戦／焼跡」——講座・全集間と世代間のヘゲモ

- ニ」概説、「牧野虚太郎詩集」
- 「東京大空襲秘録写真集」
- 「安東次男『抵抗詩論』」「荒地詩集」1956年度版
- 「現代詩講座」全四巻
- 「日本解放詩集」
- 「吉本隆明」転位のための十篇』解説 『戦後詩のポエティクス 1935-1955』(和田博文編)世界思想社 ○九年四月
- ③ 「母音」解題・総目次 『戦後詩誌総覧』四巻(和田博文・杉浦静編) 日外アソシエーツ ○九年六月
- ③ 講演 「俳誌という遺産——昭和新興俳句に関して——」柿衛忌記念講演(於・柿衛文庫) ○九年六月七日
- ③ 「観光地と俳句」『エハカキ』○九年八月
- ③ 講演 「俳句における写生とは」俳人協会主催・第二八回関西夏季俳句指導講座(於・エルおおさか) ○九年八月三日
- ③ 「研究動向 現代俳句」『昭和文学研究』○九年九月
- ③ 「風生、万籟を絶つ」『俳句研究』○九年九月
- ③ 「詩界」総目次(分担執筆)、「詩行動」解題・総目次 『戦後詩誌総覧』五巻(和田博文・杉浦静編) 日外アソシエーツ ○九年十一月
- ③ 「現代詩」総目次(分担執筆)、「パテ」解題・総目次 『戦後詩誌総覧』六巻(和田博文・杉浦静編) 日外アソシエーツ ○九年十二月

### 明里千章

- ③ 「『花供養』書誌」(共著)『アート・リサーチ』一〇年三月
- ③ 座談会 「第五回島原「蕪村忌」大句会」『俳句研究』一〇年三月
- ① 「映画から見た『1Q84』」『MURAKAMI Hanaki Study Books 13 1Q84 スタディーズ BOOK1』(共著)若草書房 ○九年十一月

### 石原深予

- ① 『前川佐美雄編集『日本歌人』目次集(戦前期分)』私家版 一〇年二月

### カ行の部

#### 北川扶生子

- ① 『コレクション・モダン都市文化 第53巻 結核』ゆまに書房 ○九年十二月
- ② 「尾崎翠における身体と民俗」『江古田文学』○九年七月
- ③ 「尾崎翠と金子みすゞ」『日本海新聞』○九年五月二十六日
- ③ 「再興院展・古典のイメージ」新『日本海新聞』○八年六月十二日
- ③ 「寺田操講演 「尾崎翠と金子みすゞ——都市文学とモダニズム」に寄せて」『尾崎翠フォーラム通信』○九年四月
- ③ 講演 「鳥取砂丘と文学」(鳥取市

民講座、於鳥取市生涯教育センター) ○九年七月十二日

- ③ 口頭発表 「『自然の描き方』を習う——明治期の〈美文〉における自然描写」、国際シンポジウム「エコクリティシズムと日本文学研究——自然環境と都市——」(立教大学主催・青山学院大学・コロンビア大学共催、於・立教大学) 一〇年一月九日

### 木村小夜

- ① 『展望 太宰治』(分担執筆) ぎょうせい ○九年六月
- ② 「魚服記」と上田秋成「夢応の鯉魚」『太宰治研究』○九年六月
- ② 「誤算の闇——菊池寛「藤十郎の恋」試論——」『福井県立大学論集』一〇年二月

### 工藤哲夫

- ① 『賢治考証』和泉書院 一〇年三月

### 熊谷昭宏

- ① 「死に至るスポーツを語る——一九三〇年代山岳雑誌のなかの「文学」とその周辺」『スポーツする文学 1920-30年代の文化詩学』(足田雅昭ほか編) 青弓社 ○九年六月
- ② 「旅する画家の「文」——小林鍾吉の「写生紀行」で描かれたもの——」『同志社国文学』○九年十二月

月

- ③ 「現代詩」一(一)〜五(六)及び改題『現代詩誌総覧』四日外アソシエーツ ○九年六月

- ③ 「ペンギン」一〜二及び解題、「詩界」八八〜一〇二 『戦後詩誌総覧』五 日外アソシエーツ ○九年十一月

- ③ 「天秤」一〜二〇及び解題 『戦後詩誌総覧』六 日外アソシエーツ ○九年二月

- ③ 口頭発表 「登山家のモノローグ——小島鳥水『日本アルプス』第一巻の反自然主義的文学論と紀行文の考察——」(日本近代文学会二〇〇九年度十一月例会特集「文学にとつてのスポーツ」(於・明治大学) ○九年十一月二十八日

### 倉西聡

- ② 「横溝正史・翻訳「二輪馬車の秘密」(フアーガス・ヒューム)から翻案「覆面の佳人」(A・K・グリーン)へ(下)——長編小説への試行——」『武庫川国文』○九年十月
- ② 「横溝正史・エラリー・クイーン」の作品との出会い」『日本語日本文学論叢』一〇年三月

### 黒田大河

- ① 共編著『横光利一と関西文化圏』松籟社 ○八年十二月(担当項目「故郷」としての『関西文化圏』——『三つの記憶』から、)「大



阪」。黒田大河、重松恵美、島村健司、柚谷英紀、田口律男、山崎義光の共編。奥付は〇八年だが、実際の刊行は〇九年四月。

②『「わたちの国」——政治と文学の狭間で』『阿部知二研究』〇九年四月

③「堀田善衛と上海——祖国喪失」と「無国籍」のあいだで——『日本近代文学』〇九年十一月

④「カニバリズムの彼方へ——芥川龍之介とわれわれの時代」『解釈と鑑賞』一〇年二月

⑤書評「河田和子著『戦時下の文学と（日本的なもの）——横光利一と保田與重郎』」『昭和文学研究』一〇年三月

### 小林幹也

③「継承について」『短歌研究』〇九年四月

④「水から身体へ——尾崎まゆみ歌集『時の孔雀』書評——」『玲瓏』〇九年五月

⑤「塚本邦雄は（寂しき帝王）か？」『歌壇』〇九年八月

⑥「塚本邦雄のシュルレアリスム——『緑色研究』を起点として——」『近畿大学日本語・日本文学』一〇年三月

### サ行の部

### 佐藤秀明

①『三島由紀夫の文学』試論社 〇

九月五月

②「解説」『六白金星 可能性の文学 他十一篇』岩波文庫 〇九年八月

③「豊饒の海」創作ノート⑤「翻刻共編、「共同討議」三島戯曲を演じる——中山仁氏を囲んで」共編『三島由紀夫研究』〇九年八月

④「父性の変容——山田太一氏の作品」『劇団昂公演「河の向こうで人が呼ぶ」プログラム』〇九年十月

⑤「豊饒の海」創作ノート⑥「翻刻共編『三島由紀夫研究』一〇年一月

### 真銅正宏

①共編著『言語都市・ロンドン 1861-1945』（共著者 和田博文・西村将洋・宮内淳子・和田桂子）藤原書店 〇九年六月

②『永井荷風・ジャンルの彩り』世界思想社 一〇年一月

③「コントをめぐる断章——荷風戦後短篇小説の世界——」『国語と国文学』〇九年九月、

④「音曲・歌舞伎・浮世絵——荷風の創出——」『永井荷風 仮面と実像』（柘植光彦編著）ぎょうせい 〇九年九月

⑤「荷風伝の空白——初代藤蔭静枝の書簡をめぐる——」『日本近代文学館年誌 資料探索』5 〇九年

十月

①「画家たちの描写——日本人旅行者の見たイタリア（4）——」『人文学』一〇年三月

②「流行作家風葉の小説作法」『小栗風葉あんない』一〇年三月

③「宮本輝の小説作法」『IN★POCKET』〇九年七月

④「言葉が定着するもの／書評・苗村吉昭『文学の扉・詩の扉』「季刊」びーぐる——詩の海へ——」〇九年七月

⑤「口頭発表「永井荷風におけるアメリカ」AKP-DOSHISHA ジョイント・シンポジウム（於・アメリカ合衆国、スミス・カレッジ、英語）〇九年九月十二日

⑥「口頭発表「近くて遠きもの、」文学研究」と「小説の書き方」日本文学協会二〇〇九年度秋季大会（第二日目）「文学との出会い方」（於・立正大学）〇九年十一月二十九日

⑦「口頭発表「世界一周旅行記の中のイタリア——日本人旅行者の見たいイタリア——」京都大学人文科学研究所共同研究班例会「近代日本と異文化接触——同時代化」を生きた人々の記録——」（於・京都大学人文科学研究所本館）一〇年二月一日

⑧「エッセイ「雑誌『文芸界』との出会い」『Net Pinus』（リレーエッセイ「探す・繰る・読む——雑誌の楽しさ」第4回）〇九年十二月

### 須田千里

①『明治戯作集』（新日本古典文学大系 明治編9）岩波書店 一〇年一月

②「怪談」「策略」と「骨董」『雑子のはなし』の原拠『文学』〇九年七月

③「反自然主義文学を越えて——近世文学の受容、谷崎潤一郎との類比——」『国文学 解釈と鑑賞』〇九年九月

④「芥川龍之介文庫和漢書の書き込みについて」『日本近代文学館年誌 資料探索』〇九年十月

⑤「芥川旧蔵『芭蕉全集』と『芭蕉雑記』」『国文学 解釈と鑑賞』一〇年二月

⑥「尾崎紅葉」「谷崎潤一郎」「芥川龍之介」「辻潤・宮島資夫・安成貞雄」「佐藤春夫」「別冊太陽 美と幻影の魔術師 泉鏡花」〇九年三月

### 夕行の部

### 竹松良明

①「解題「南方徴用作家叢書・ビルマ篇」全14冊（木村一信・竹松良明編集）龍溪書舎 一〇年二月一括刊行

②「阿部知二の（上海もの）の色調——戦時下上海の都市イメージの変容——」『阿部知二研究』〇九年四月

- ③「ビルマ派遣軍徴用作家たちの諸相」『週刊読書人』〇九年九月四日
- ③「『冬の宿』の構造」『イン・ポケット』一〇年一月
- ③「阿部知二著書目録」『冬の宿』講談社文芸文庫一〇年一月

#### 外村彰

- ①『念ふ鳥 詩人高祖保』龜鳴屋 〇九年八月
- ①編著『撩亂の牡丹 かの子未刊随筆集』青柿堂一〇年二月
- ①共編著『ひたむきな人々——近代小説の情熱者たち——』龜鳴屋 〇九年四月
- ②「室生犀星の短歌から」『ポトナム』〇九年八月
- ②「教員から『アララギ』編集者へ——島木赤彦」「『職業』の発見 転職の時代のために」(池田功・上田博編) 世界思想社 〇九年九月
- ②「岡本かの子『母子叙情』の短歌」『ポトナム』一〇年二月
- ③「『外村繁書誌稿』補遺——年表追加・参考文献篇——」『文献探索 2008』金沢文圃閣 〇九年六月
- ③「近代の肖像 岡本かの子」①②『中外日報』〇九年九月十五、十七、二十九日
- ③執筆協力『入試現代文類出語700』(数研出版編集部編) 数研出版 〇九年十二月

- ③「萩原朔太郎全集未収録資料紹介——『中外日報』掲載・散文八篇と選評——」『前橋文学館研究紀要』一〇年三月

#### 友田義行

- ②「『映像論争』あるいは『映像と言語論争』試論——モニター・映画言語・芸術総合化をめぐる——」『映像学』〇九年五月
- ②「安部公房『他人の顔』における身体加工——共同体・皮膚の言語・他者——」『日本近代文学』〇九年五月
- ③口頭発表「映像と言語をめぐる論争」『Visual Studies Network』〇九年四月
- ③口頭発表「日本の炭鉱映画史と三池」『立命館大学国際言語文化研究所シンポジウム』〇九年六月
- ③口頭発表「絵画と映画のあわい——勅使河原宏『北斎』をめぐる——」『立命館大学日本文学会』〇九年九月
- ③口頭発表「目取真俊の不敬表現——報道・写真との比較から——」『日本比較文学会』〇九年十月

#### ナ行の部

#### 内藤由直

- ②「林房雄『青年』における本文異同の戦略——国文学への道——」『日本近代文学』〇九年五月
- ②「第五階級の文学——犬田卯の農

- 民文学／プロレタリア文学論——」『立命館文学』〇九年十二月
- ③口頭発表「Tenko in Hayashi Fusao's "Seinen no kuni" and "Overcoming Modernity"」『Inter-Asia Cultural Typhoon 2009』(於東京外国語大学) 〇九年七月

#### 永淵朋枝

- ②「明治の子殺し——北村透谷「鬼心非鬼心」における「社会」と「魔」——」『日本近代文学』〇九年十一月
- ②「藤村「処女地」に執筆した女性作家達(三)——細川武子、辻村乙未、若山喜志子」『神女大國文』一〇年三月
- ③「もしこの小児なかりせば日々二銭を省くことを得べきに」『北村透谷研究』〇九年六月
- ③「哀切な魅力を放つ「佐幕派の文学史」(平岡敏夫著『北村透谷 没後百年のメルクマール』北村透谷と国木田独歩』書評)『図書新聞』〇九年九月五日
- ③「島崎藤村の書簡——明治38年12月11日広助宛——」『歴史資料館ニュースレター(明治学院歴史資料館)』一〇年三月

#### ハ行の部

#### 花崎育代

- ①編著『小松清——フランス知識人との交流』(「小松清の戦中戦後」

- 「解題『沈黙の戦士』／『フランスより還る』」「小松清年譜」「参考文献」柏書房 一〇年二月
- ②「柳美里と鷺沢萌——東京・神奈川——錯綜と断絶をかかえて」『韓流百年の日本語文学』(木村一信・崔在喆編) 人文書院 〇九年十月
- ③口頭発表「恋愛と結婚と——大岡昇平・スタンダール・司祭アンドレ——(受容から創造性へ——) 近代日本文学におけるスタンダールの場合」二〇〇九年度第3回研究会 於・財団法人国際高等研究所 一〇年三月五日

#### マ行の部

#### 峯村至津子

- ②「鬼心非鬼心」と「にこりえ」『北村透谷研究』〇九年六月
- ②「まなざしのゆくえ」『京都大学国文学会会報』〇九年九月

#### 宮菫美佳

- ①コラム「プロレタリア文学とスポーツ」『スポーツする文学——1920-30年代の文化詩学』〇九年六月
- ②「小学校新学習指導要領における道徳との関連の扱いについて」『常磐会学園大学紀要』一〇年三月

#### ワ行の部

## 渡部麻実

- ② 「木内錠「他人の子」——ヒロインの不可解な笑い——」『国文学解 釈と教材の研究』○九年四月
- ② 『幼年時代』のフィクションナリゼーション——『室生犀星研究』○九年十一月
- ② 「堀辰雄『燃ゆる頬』論——コクトーからラディゲへ——」『山邊道』○九年十一月
- ② 「『秋の雨』——記憶更新の京旅行」『芸術至上主義文芸』○九年十一月
- ③ 口頭発表「堀辰雄とジャン・コクトー」四季派学会冬季大会 ○九年十二月

## 渡邊浩史

- ① 共著『私的には……からの脱出』創文社 ○九年八月
- ② 「〈新しい小説〉としての表現技法——内田百閒「東京日記」論——」『國學院雑誌』○九年九月

## 渡邊ルリ

- ② 「子どもと文学——井上靖『しろばんば』に見る少年の成長」『子ども学序説』（共著／第七章）○九年十一月
- ② 「中島敦『北方行』に見る一九三〇年中原大戦下の中国——『北方行』序論——」『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』一〇年三月

## 和田崇

- ② 「『労働の価値』が意味するもの——徳永直の転向作品と生産文学——」『論究日本文学』○九年十二月
- ② 「『蟹工船』の読めない労働者——貴司山治と徳永直の芸術大衆化論の位相——」『立命館文学』○九年十二月
- ③ 「翻刻 貴司山治「新段階における根本方針と分散的形態への方向転換」(一九三四年・未発表原稿)——(共著 伊藤純、池田啓悟、島木圭太、村田裕和、安岡健一、和田崇)『立命館文学』○九年十二月

## 和田芳英

- ② 「ロシア文学者昇曙夢の生涯と芸術を語る——武者小路実篤「昇曙夢の時代があった」——」『国文学』一〇年二月
- ③ 「ロシア文学者昇曙夢関連資料を『鹿児島県立奄美図書館』に寄贈して」奄美テレビ出演 ○九年四月九日
- ③ 「奄美大島祖国復帰運動における昇曙夢の功績を語る」奄美FM出演 ○九年四月九日
- ③ 講演「ロシア文学者昇曙夢の生涯と芸術を語る」関西大学国文学会 ○九年七月十八日
- ③ 「昇曙夢略年譜」『原郷の奄美昇曙夢とその時代』（田代俊一郎著）所収 書肆侃侃房 ○九年十一月
- ③ 「ロシア文学の蘊奥を究めた昇

曙夢」『南海日日新聞』一〇年三月五日

## 事務局から

○維持会費の納入がたいへん少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしく願います。

○昨年度秋季大会のブックレット『支部創設30周年記念・日韓共同開催特別企画 海を越えた文学——日韓を軸として——』が和泉書院から刊行されています。ぜひ一読ください。

## ☆関西支部公式ブログ

<http://www.tb.biglobe.ne.jp/~kansai-amjls/>

今後も、こちらのブログに日本近代文学会関西支部に関する情報を掲載していきます。

日本近代文学会関西支部会報 第十四号  
二〇一〇年八月三十日発行  
発行者・明里千章（支部長）  
発行所・日本近代文学会関西支部事務局  
〒564 - 8511 大阪府吹田市岸部南2 - 1  
大阪学院短期大学 経営実務科  
竹松良明研究室内